

初級中国語のオンラインクラスにおける活動と評価 Activities and Assessments for an Online Elementary Chinese Class

山崎直樹 (関西大学外国語学部)

Naoki Yamazaki (Kansai University, Faculty of Foreign Language Studies)

キーワード 意味の重視、言語構造への気づき、言語構造への洞察、態度 / **Focus on meaning, Awareness of language structure, Insight into language structure, Attitude**

1. はじめに

関西大学では、2020年度春学期は全面的にオンラインによる授業実施をよぎなくされた。入門レベルの外国語を教える授業も例外ではない。その状況の中で、筆者がどのようなオンライン授業を実施したかを、クラスでの活動とその評価方法的に絞って紹介したい。

なお、この授業は、オンライン会議システム (Zoom ミーティング) を使用した同期型の授業として実施された。

2. この授業の性格

ここで紹介するクラス (「プラスワン外国語 (中国語)」) は、外国語学部で英語を専攻言語とする学生のための第2外国語としての中国語の授業である。この授業は「自分がよく知っている身近なことからについて、簡単な語句を使った短いメッセージのやりとりができる」を到達目標にしており、また、この目標の達成のために、中国語という言語の構造にたいする基本的な理解を促進することも重視している。また、学習者を自律的な学習者にするため、「中国語を学ぶ方法」を学ぶスキルを習得させることも目標の1つである。

3. 全体に注意したこと：タイムラインの明示

授業の実施にあたり、最も重視したのは、授業が進行する「タイムライン」の明示である。同期型の遠隔授業なので、Zoom ミーティングを使用したほか、関大の Learning Management System (以下、LMS) はもちろんのこと、Google フォーム、Google スプレッドシートなども使用した。そして、このようなさまざまな道具の間を、学生が

まちがいをなく往来するために、「使用する教材とツールへのリンクを単一のタイムライン上に配列する」ウェブページを、毎週、自作した (図1は、ある週の授業のためのページの目次)。

PlusOne 07-09

0. 質問に答えます

0-1. 文末の助詞 “吧 ba”

1. 発音の練習

1-1. “4” と “10”

1-2. “每天”

2. 語順の復習

2.1 先週の課題の補足

2-2. 練習問題

3. 「毎朝何時に起きますか？」

3-1. 聞きかた / 答えかた

3-2. ゲーム

4. ～した

4-1. ～した / ～しなかった / ～していない

4-2. 答えかた

4-3. 発音の練習

4-4. みんなのふだんの生活は？

5. 録音課題の準備

5-1. 「わたしの理想の日曜日」

5-2. 注意事項と評価基準

図1 ウェブページの目次

受講生は、毎週、授業が始まる時刻に、ここにアクセスし、まず、前回の授業で出た質問に対する回答や前回の授業の補足を読み、復習用の練習

問題に取り組む。これらは、当該のページに上から順に配列されているので、それを追っていただくだけである。その「Q&A、補足、復習」ブロックの最後に、「〇時〇分になったら、Zoom ミーティングを開始します」という指示がある。

その後は、Zoom ミーティングを進行させつつ、授業内のすべての活動を、このタイムラインにそって進行させる。学生は上から下にスクロールしていただくだけである。モデル音声、学習用動画なども、すべてこのページからのリンクで参照できる。時間がかかる個人作業の場合は、いったんミーティングを中断することもあるが、その場合も、このページに「〇時〇分になったら、Zoom ミーティングを再開するので……」のような指示を書いておく。

学生に何らかのアウトプットをさせ、それを学生間で共有させたい場合は、あらかじめ LMS に掲示板を作っておき、そこに書き込ませる。学生は先行した書き込みを参照できるが、テストではないので、それがむしろ狙いである。なお、対面授業であれば、アウトプットをためらう学生に対し、教師が助言をして背中をおすこともできるが、オンラインではそれが難しいので、「他の学習者のアウトプットを見て、自分のアウトプットを事前に調整することにより、アウトプットの勇気を得る」という方略を使えるようにした。いつどのタイミングでどの掲示板に書き込みをしてほしいかなども、すべてタイムラインに記す。

なお、この授業専用の LINE OpenChat を設置し、トラブルがあった場合には即座に教員に連絡できるようにしておいた（教師と受講生の間には常に複数のチャンネルを確保しておくことも、オンライン授業の要諦であると思う）が、「迷子になった」という連絡はなかった。

この授業設計に慣れた学生は、指定の時間よりも早くアクセスして自習したり、授業終了後に復習用としても使っていたりしたようである。

なお、このようにプログラムされた設計では、早く課題を終えて時間を余す受講生も出てくる（アンケートで「進度がやや遅め」という評価を

した受講生もいた）。しかし、この設計の利点は、例えば音声の学習が苦手な学習者がいたとして、その学習者が、自分のペースで、自分がかけたい時間をかけて学べることにある。早く課題を終えられる学生が遊んでしまうことよりも、苦手な（あるいは得意な）課題にはゆっくり時間をかけたい学生に、できるだけ時間を与えることのほうが重要である。また、90 分の対面式授業と等価になるのは、学生を 90 分、PC の画面の前に拘束しておくのではなく、そのような「拘束」を 90 分間続けたら、そうとうなストレスになることも考慮し、「遊んでいる／休んでいる」時間も必要と考えた。

4. 活動の種類と狙い

このクラスでもにおこなった教室活動の類型は次のとおりである

- A. 個人化できる課題を与え、発信したい内容を音声で表現する。
- B. 学生同士でインタラクティブな発話交換をおこなわせる。
- C. 機械翻訳を使い言語形式と意味との関係を探らせる。

これら A-C の活動の狙いは次のとおりである。

表 1 活動の狙い

	A	B	C
音声に対する気づきの促進	✓		
文法への気づきと洞察の促進			✓
発信する能力を高める	✓	✓	
受け取った「意味」を考察する		✓	
形式よりも意味に焦点をおく	✓	✓	
形式と意味の関係に焦点をおく			✓

これらは外国語を学ぶ授業でおこなう活動としては別に新しいものでも変わったものでもない。筆者が以下で報告したいのは、これらをオンラインでどう実施したかではなく、オンライン授業の特性を考慮した結果、教室授業で同種の活動をおこなっていたときに比べ、評価の観点が変化した

ということである。

なお、「発音がへたくそだと自覚している」「文法を考えるのは嫌い」「他人と会話するのは気おくれがする」という苦手意識を1つあるいは複数もつ学習者も多い。上述の類型は、そのような苦手なスキルが含まれる活動があっても、別のタイプの活動では活躍できるよう、活動の類型が多様になるよう考慮した結果である。

5. 「個人化できる課題」について

5.1. 課題と評価の観点

ここでは、前節で種類を示した活動のうち「A. 個人化できる課題」について紹介する。活動自体はありふれたものである。

[課題]「わたしの理想の日曜日」というテーマで、自分がやってみたい日曜日の日課を箇条書きのメモにして、それを読み上げてください。

[形式と内容についての評価] 不可能でもいいので、楽しい独創的な日課を考えてください／多少、文法をまちがえてもかまいません／個性と量が評価のポイントです。

[音声についての評価] (次節を参照)

教室でこの種の活動をおこなうときは、内容と同時に言語形式の正確さにも焦点をおく。しかし、オンラインでは個々人に対しこまめなフィードバックは難しい(教室では他の学生とは別に個人指導も可能であるが、オンラインでは1人への指導は全員のタイムラインを占拠してしまう)。しかも、いちども直接会ったことのない学生が相手であるので、「正しさの要求」は学生の委縮につながると考え、上記のような個人化を評価の観点にした。

5.2. 評価の観点の転換

音声教育は、従来は正確性(=母語話者の発音にどれだけ近づけるか)を重視する観点が主流であったが、現在では「わかりやすさ」を優先する観点が主流になりつつある。これは、「母語話者と同じでなくてもかまわない、どれだけ意味がわかりやすい発音ができるか」という習熟度を見るということである。しかし、どちらにせよ「学習者

が産出した音声が多かれ少なかれ目標とする状態に近い」かを評価することは同じである(正確性重視か、わかりやすさ重視かというちがいはあるだけ)。

さて、音声の習得は、個人差が最も出やすい、得手不得手をはっきりする領域なので、最もこまめなフィードバックと教師のはげましが必要である。それなのに、フィードバックには不利なオンライン授業という環境での学習成果を、対面授業の時と同じように評価するのは問題がある。

そこで、(以前から考えていたことであるが)評価の観点を次の[旧]から[新]のように変えた。

[旧] α と β という2種の音の区別が、意味の区別に重要な役割を果たしている場合、どれだけその区別を実現できているか。

[新] α と β という2種の音の区別が、意味の区別に重要な役割を果たしている場合、その区別が何によってできているかに、どれだけ気づいているか、そして、その区別を実現しようとどれだけ注意をはらっているか、そして、それがどれだけ成功しているか。

要するに、言語構造(音声)への気づき、その重要性の認識、そしてそれをどれだけ実現しようとしているかという態度……を評価する方向に転換したわけである。「成功しているか」はこれまでの観点と大差ないが、そこに至るまでの「気づき」と「態度」を重視した評価法になっているところが変化である。

以下は学生に配付したルーブリックである。長くなるが、参考資料として利用していただくため掲出する。なお(例)の部分は実際はもっと長く、チェックリストとしても使えるようにしてある。

表2 音声のスキルを評価するルーブリック

	目標以上を達成	目標を達成	目標まであと一歩
(1) 日本語にない	日本語にない音があることを理解し、全体	日本語にない音があることを理解し、全体を通じて、それを再現し	日本語にない音を再現しようという意識が見られない箇所が、いく

い音	を通じて、それを再現しようとして意識して発音し、だいたい成功している。	ようと意識しているのがよくわかる。 (例) zi, ci, si の母音をまがりなりにも他の i と区別しようとしている、e, ü などの母音を正確でなくてもそれらしく発音しようとしている……	つかある。 (例) yu を日本語の「ユ」のように読む……
(2) 紛らわしい音	紛らわしい音のペアがあることを理解し、全体を通じてそれを区別しようとして意識して発音し、だいたい成功している。	紛らわしい音のペアがあることを理解し、全体を通じてそれを区別しようとして意識しているのがよくわかる。(例) ji と zhi, qi と chi, xi と shi などを区別しようとしている、有気音と無気音を区別しようとしている、四声の高低差を意識している……	紛らわしい音のペアを区別しようという意識が見られない箇所がいくつかある。 (例) “he”を英語の“he”のように読む、qu を cu のように読む、cong を kong のように読む、si を xi のように読む、zhi と ji を区別しようとし、有気音と無気音を区別しようとしていない、四声を見視している……

5.3. 音声のスキル面での効果

オンライン授業では、学生がすべてデジタル機器と通信環境を備え、常にこれらの道具を学習に活用することができるわけで、これは大きな利点である。

この環境を活用し、第3節で述べたウェブページなども活用し、モデル音声にいつでもアクセスできるようにし、また LMS を使って提出する課題は、何度でも再提出できるようにした。

これらの相乗効果であろうが、今期の学生の音声習熟度は、昨年度までの評価基準を用いても、昨年度までの学生より高かったように思われる。

6. 「B. インタラクティブな発話交換」について

6.1. 活動の概要

おこなったのは、例えば、次のような「インタビュー&レポート」の活動である。この活動自体は別に目新しい活動ではない。

- (1) 日常の日課をたずねる質問をたくさん用意し導入する。
- (2) 4~5人のグループに分ける (Zoom のブレイクアウトルーム機能を使う)。
- (3) グループのメンバーが順に、他のメンバーに対して質問をする。質問は、(1)で導入した質問から、したいと思う質問を選ぶ。
- (4) 回答は全員が記録する。メンバー全員が質問を終えた時点で、グループ内のそれぞれの学生につき、4~5種類の情報が蓄積される。
- (5) (4)の情報にもとづき、1人1人がグループ全体の傾向について分析をおこない、掲示板に書き込む (この作業は日本語で、のちに中国語で)。
- (6) 特筆すべき行動について、「〇〇さんは~だった。~だと思ふ」のように報告と感想を書かせる (これも日本語で、のちに中国語で)。
- (7) 他のグループの掲示板を見に行き、自分のグループの傾向との異同について、コメントを書かせる (日本語で、のちに中国語で)。

安易な活動設計では、(3)か(4)の段階で終わりだが、それでは、学生は仲間の発言を真剣に導き出そうともしないし、それを真摯に理解しようとする。アウトプットの形態があらかじめ指定されているからこそ、学生はどのようなインプットが必要か自分で考え、他者のメッセージを懸命に理解しようとする。

このように、情報をえるのは何のためか、何の役にたつのか、次の活動にどのように生かされるのかを明確にしないと、発話交換は、複数でおこなう音声を使った文法ドリルになってしまう。

教室であれば、この種の活動をおこなうとき、教師は巡回し、熱心でない学生に対しては注意をする。しかし、ブレイクアウトルームではそれがしにくい（特定のルームに顔を出そうとすると、活動のじゃまになる）。

また、教室では、学生の産出した言語形式の誤り等に対し、随時、フィードバックをおこなうことが可能であるが、ブレイクアウトルームではやはり難しい。

よって、オンラインのこの活動では、何が知りたくて質問を選択したか、相手の言うことをきちんと理解し、自分のことをきちんと伝えた結果、どのような情報が得られたか、その情報から得られた考察は何か……など、つまり、やりとりしたことばから得られたものが、自分や相手にどういう意味をもつかに關係する部分のみを評価することにした。

なお、上述の(5)-(7)の手順は、煩雑に感じられるかもしれないが、オンライン授業で使われるサービスの使用方法に習熟しデジタル機器の使用方法に習熟した学生であれば、かなりの速度でこなすことができることがわかった。情報の開示、共有、それらを元にしたインタラクションのスピード感は、オンライン授業実施以前と比べて、格段に進歩した点だといえる。

6.2. 評価の観点の転換

従来型の授業であれば、この種の活動で評価されるのは「言語構造（音声／文法）の正確さ／発したことばの意味の理解の正確さ／発話交換の円滑性」などであろうと思う（ここでの「意味」はやりとりした文そのものの「意味」ということであり、それが自分や相手にどのような意味をもつかということではない）。これらはやはり「モデルにどれだけ近づけたか」が評価の基準となる。これらで測られる能力は、各種の外国語の能力試験等で測られる能力でもある。しかし、この授業で採用した観点は、それとは異なる。

7. 「C. 機械翻訳を使い言語形式と意味との關係を探らせる」について

7.1. 課題の概要

知識を記憶するより、ちがいに気づくこと、なぜちがいが生じるのかを考えることのほうが重要だというのが、筆者の考えである。また、筆者は、「教師が解答の提出のみを要求し、その解答の正誤を判定する役目をすべて教師が担うと、自分のアウトプットの適切性を自分で検証しようとする態度が育たない」可能性があるとして指摘したことがある（山崎、2015）。

以上の考えにもとづき、この授業では、文法の知識を問う筆記試験を成績評価の方法の一部とすることをやめ、後述する課題を出した……というより、「知識」を問う従来型の問題は「誰がやっても同じ解答になる問題」であるので、成績評価に使うためには、不正行為の防止に腐心せざるを得ない。教室授業であればそれも可能であるが、オンライン授業では、ウェブカメラを使った監視にまで発展してしまう。そのような本質的ではない努力をするよりも評価の観点を変えることを選択した。

さて、この課題は、簡単にいうと、日本語話者が機能を誤解しやすい中国語のある機能語について、それがあつ場合とない場合でどのように意味が変わるかを、複数種類の機械翻訳のアウトプットを使って比較し、また、自分自身のアウトプットとも比較し、どこが異なるのか、どのアウトプットが最適だと考えられるか、そしてそれはなぜかを考えさせようとするものである。以下に課題の手順と評価の基準を掲げる。

【課題】

- (1) 「わたしは××が好きではない」という意味の中国語（C1）を書く。
- (2) C1の文末に“了”という助詞を加え¹（C2）、それを自分で日本語にする（J2）。
- (3) 3種類の機械翻訳²にC2を入力として与え、3種類のJ2を得る。
- (4) 機械翻訳による3種類のJ2を相互比較する。また、自身のJ2とも比較する。そして、

どこが違うかを見つける。

- (5) 4種類のJ2のうちどれが最も適切かを選ばせ、そう思う根拠を述べさせる(「この助詞はどんな機能をもっているか」を直接尋ねていないことに注意、この種の質問は教科書の説明の丸写しを誘発する)。

【評価の基準】

入門段階の学習者は、自分のアウトプットの適切性を判断することは難しいし、また、機械翻訳にはまちがいもあるので、学習者自身の翻訳の正誤や、「どの翻訳が適切か」という判断については、評価の対象としない。評価の対象とするのは、「何が異なるか」「どうしてそうなるのか」に自分でどこまで気づき、洞察できたか、である。

7.2. この活動の意味

山崎(2015)で指摘したように、文法の知識の確認のために作文をさせるような課題では、学習者は自分の産出した文をそのまま教師に渡し、それを評価する役目を、教師が全面的に担う。しかし、これでは、「学習者自身が自分のアウトプットをモニターする」という自律的な学習態度が育たない。

生身の人間が、学生の産出した文に、そのつど何らかのフィードバックを与えてくれればいざばんよいのだが、それは非現実的である。しかし、機械翻訳は、学習者が文の中の小さな形式を変えただけでも、意味を大きく変えて翻訳することがある。学生が自分の産出した文の伝える意味が適切かどうか、今よりも少し注意を向けるようにするための手段として機械翻訳は有効である。

なお、学習者は、名詞や動詞などの実質語に多くの注意を向け、意味が不透明な、そして母語に対応する形式のない助詞などには注意を払わない傾向があることも指摘されている。機械翻訳によって構造に向ける「気づき」を促進する課題は、こうした機能語などに対して、より効果的である。

「このような課題に対してでも、教師の知らないところで、学生同士が相談をしたりする可能性があるのではないか？」という質問を受けたことがあるが、筆者は、むしろそのような相談が自発

的におこなわれることを望んだ。学習者同士の協働学習の一種だからである。

なお、受講生から提出された課題の回答は、こちらの思惑どおりいろいろ考えを巡らせた形跡のあるもの、こちらの期待以上に深い洞察をしたもの、深く考えずにすぐに思考を打ち切ったもの、いろいろあったが、他人の書いたものを丸写しにしたような回答はなかった。

8. まとめ

音声にせよ、文の産出にせよ、従来の言語の構造的側面への評価は、多かれ少なかれ、与えられたモデルにどれほど近いかの評価であった。今回のオンライン化にあたり、このような評価から、「言語構造への気づきがあったか、言語の構造に対する洞察ができたか、またそれらが成功しなかったにせよ、いかにそれを実現しようとしたか」に対する評価へと転換した。

これは図らずも、各種の外国語の能力試験で測られるような能力への評価とは異なる観点の評価となった。とても興味深いことである。

註

1. この操作により「好きではなくなった」という変化を表した文になる。なお、この文末助詞の用法は日本語話者が習得しにくい項目の1つである。中国語では状態動詞の場合、述語の形は時制の制約を受けないという特徴があり、また、日本語の「～ない」に完了の接尾辞を加えて「～なかった」を派生する現象からの類推により、この形は「好きではなかった」という意味だと誤解されやすい。
2. 『百度翻訳』『DeepL』『Google 翻訳』の3種を使用した。前2者は、日中語間の翻訳においては、無料で使用できるウェブ上のサービスとしては群を抜いた精度をもつ。『Google 翻訳』は少し劣るが、比較の対象としてはちょうどよい。

参考文献

山崎直樹(2015)「自然言語解析技術の発達が外国語教育にもたらすもの」『漢字文献情報処理研究』16, 6-16.

謝辞

岩崎千晶先生（関西大学教育推進部）には、投稿の勧めから内容の取捨選択に至るまで、多大な助言をいただいた。ここに記して感謝を申しあげたい。もちろん、本稿の不備に関して、その責は筆者だけにある。